



撮影 北嶋 俊治氏

館

報

1999  
第4号

# 中原中也記念館

## 目次

「あいさつ」	福田百合子	1
一六四番目に『山羊の歌』を贈られた男	竹田巖	2
大空の下の朗読会	伊藤孝子	3
小さなお誕生会		3
公共建築百選	荒瀬秀治	4
『未黒野』と吉田緒佐夢	和田健	4
中原中也記念館公開講座		5
『山羊の歌』が世に出るまで		6
小企画展示		6
開館5周年を迎えて		7
常設展示パネル替え		7
寄贈資料		7
新収蔵資料紹介		8
中原中也の会入会の手引き		8
中原中也記念館の記録		9
第四回中原中也賞		10
第五回中原中也賞募集要項		10

## 「あいさつ」

中原中也記念館 館長 福田 百合子

中原中也記念館は、平成六年二月十八日開館以来、多くの方々に支えられて、今年五周年を迎えることができました。入館者も約二十五万人を数えます。

開館記念行事として、新発見の資料「前川佐美雄宛書簡」の展示という幸運に恵まれ、御子息前川佐重郎氏にも来館していただきました。歌誌「日本歌人」の創始者であり、秀れた実作者であり、「日本浪漫派」の代表的人物としての前川佐美雄と、中原中也の接点を改めて見直し、ご縁の深さに強い感慨を覚えました。

なお、中也没後のことではありませんが、山口市における「日本歌人」グループの短歌会に出席された前川佐美雄とその周辺の人たちの写真も出てきて、話題となりました。当時の歌会出席の方々から、懐かしい思い出話をうかがい、これも中也記念館を媒体としての交流、連繋の賜物と感謝致しております。

また、昨秋には、鎌倉文学館で中也の特別企画展を開催していただき、講演会や文学散歩など盛況でございました。中也終焉の地としてのゆかりから、珍しくお目にかかることの出来た人も数多く、有難い思いに捉えられました。

中也記念館本館裏に増築された分館と、大通りに面した前庭も三年目に入り、全体としてよく調和したたすまいを見せてきました。

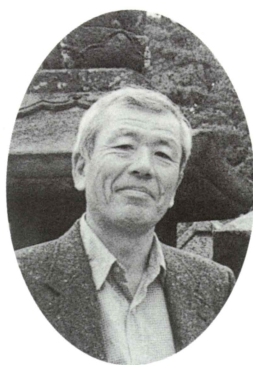
十一月には、建設省から「公共建築百選」として、山口県では唯一、中也記念館が選ばれました。みんなに親しまれる空間、ますます充実した空間へと、今後も努力してゆきたいとの念願を再確認したことです。

どうぞこれからも、よろしくご支援、ご教示下さいますよう、お願い申し上げます。

# 一六四番目に

## 『山羊の歌』を贈られた男

竹田 巖



### △紹介△

竹田 鎌二郎 明治三十四年六月六日  
東京新宿番衆町に生まれる。  
先祖は、貧乏御家人とのことであるが  
父親は日本郵船に勤務、少年時代は、か  
なり裕福な家庭に育つ。

麻生中学を卒業後早稲田大学英文科に  
進むも父親の死去に伴い一年にて中退。  
以後報知新聞社等に勤務していた模様。

大正十四年一年志願兵として近衛し重  
兵大隊に入隊・昭和四年十二月妻ミネと  
結婚・昭和六年報知新聞社を退社・自宅  
を改装し、喫茶店「櫛」を開く・昭和八  
年喫茶店「櫛」を閉店、以後定職無し。

昭和十二年七月動員下令、北支戦線に  
従軍・昭和十五年八月召集解除、帰還。

昭和十六年番衆町を引き払い、北多摩  
郡国分寺に転居、戦時中は南部工場に勤  
務、終戦後は進駐軍キャンプに勤めてい  
たこともあったが、上役と喧嘩して退職、  
素人下宿屋を開業。以後俗世間とのわか  
わりを断った生活を送る。

昭和四十七年九月死去。

### △事跡△

麻生中学時代に青山二郎を知り以後親  
交を結ぶ。昭和六年当時青山二郎の住ん  
でいた花園アパートは、竹田鎌二郎の紹  
介によるものらしい。日記によれば花園  
アパート時代は毎日の如く青山宅に行き  
来していたようであるが、昭和十二年召  
集を受けて以後は、全く交際を絶ってい  
る。

青山二郎の依頼によるものか、小林秀  
雄著「続文芸評論」外函装幀の版木の彫  
刻と木版刷りを担当、特に木版画の技術  
を持っていたとは思えないが、当時経営  
していた喫茶店「櫛」のマッチ・メニユ  
ー、料亭「なだ万」のマッチ等を木版で  
刷っていたところを見ると、アルバイト  
のつもりでやったものか。

昭和六年五月五日、花園アパートの青  
山宅にて中原中也に会う。以後昭和十二  
年中原中也千葉療養所入院までの間、  
かなり深い付き合いがあったと思われる。  
中原中也からの書簡十数通を保存、ま  
た日記に中原中也との付き合いの断片を  
書いており、死後、ある機会により発表  
され、中原中也研究の一助となる。

### △父 鎌二郎△

私が物心ついた時は、すでに国分寺へ  
引き籠り、戦後の一時期勤めていた進駐  
軍の関係の仕事（通訳といっていたが、  
実際は看板等のペンキ塗りであったらし  
い）もやめ、素人下宿屋の爺におさまっ  
ていた。素人下宿といっても半端なもの  
でなく、自宅の部屋という部屋を全て三  
畳間に改造してしまい、それも大工を頼  
むわけではなく、造作から電気の配線ま

で自分一人でやってしまうという自給自  
足。既存の建物だけでは生活が成り立た  
ないので、建て増し、それも二階建てを  
建ててしまった。

まともな部屋は、台所と便所以外全て  
下宿人を入れてしまったので家族の住む  
ところが無くなり、親子六人父の建てた  
家とも小屋ともつかない物凄いとこで  
生活していた記憶がある。しかし父だけ  
は別に、書齋と称する小屋を建てそこで  
起居していて、中をのぞくことは、家族  
といえども許さなかった。

友達の家は、父親が勤めているか、ま  
ともな商売をやっているとかで、自分  
の家だけが、いつでも  
父が家に居り、何か  
変な感じがしていた。  
とにかく世間一般  
の煩わしいことにか  
かわることを嫌い、  
自分だけの世界を作  
っていたような、子  
供ながら、変わった  
人だな、とは想って  
いた。

生前の父から、中  
原中也や青山二郎に  
ついて何かを聞いた  
記憶はなく、ただ、「俺は文士になりた  
くて、戦争に行くまでは一生懸命やっ  
けど、家族を食わしていかなくつちゃあ  
ならないので、今は休んでいるんだ」と  
いうようなことを何度か聞いたことがあ  
った。不肖の息子は、技術系、体育系に  
進み、文学芸術にはほとんど興味を示さず、  
自分から世間との付き合いを避けていた



ので話す相手もなく、父としては寂しい  
想いをしていたのかも知れない。  
死後、日記や中也の書簡にふれてみて  
はじめて「文士になりたくて、一生懸命  
やった」という想いがわかったような気  
がした。青山二郎は別にして、中也の手  
紙だけを一束にして保管していたとい  
うことは、中也にたいして特別の感情を持  
っていたのだろうか。

日記を拾い読みしてみると、ある時期  
かなり深く付き合い合っていたようで、第百  
六十四部の番号が入った「山羊の歌」を  
贈られたことからこのことがうかがわ  
れる。

父としては、志を同じくする仲  
間として、中也の才能、生き方を  
認めたのではないか。認めたとい  
うより、憧れを感じたのかもしれない。  
中也とその周りの人達を仲  
間として捉えたことが、父の悲劇  
という喜劇の始まりのような気  
がしてならない。  
戦地での三年間の空白、戦中戦  
後の混乱、生活に追われ無為に過  
ごした時間、言い訳の条件がそろ  
った中で、「今に見ている、昔の  
仲間くらのことは」と。

気がつけばすでに自分の時代は  
去り、ただひたすら自分だけの世界に入  
り込む、類型的なひとつのパターンを、  
最後まで頑固に演じ続けていた。  
しかし、晩年はそれを楽しんでいたよ  
うで、「俺の株を買っておいだ方がいぞ、  
いまにうんと値上がりするんだから」と、  
本気とも、冗談ともつかないことをよく  
口にしていたことを想い出す。

# 大空の下での朗読会

伊藤 孝子

大空の下で詩の朗読会が開かれることを、昨年四月二十三日、中原中也記念館内での山口詩話会例会で聞き、私たちは詩話会も出席できる人は参加することになり、横水正治氏、三好郁子さん（午後、福島寿美子さんも）と私が参加いたしました。

中也館前の庭に設置された会場は、夕タミ半畳ほどのステージ、パイプイス二十数脚、スタンドマイクなど、とても簡単で気軽な雰囲気設定されており、会場には平成DADA実行委員会の方々によるコーヒの接待が用意してありました。

コーヒを頂いておりましたら、中原中也の末弟である伊藤拾郎氏が奥様と来られ、「まあ：お変わりなかったの」と手を取り合い、「久しぶりに今日は一緒にやりましょう」と話がすぐまとまり、二人はさっそく音の調節とリハーサルを館長室で済ませました。そこへタイミングよく出演時刻の案内があり、先に伊藤拾郎氏が、今日の特別出演であるハーモニカで演奏をされました。

素朴な楽器の絶妙な音色に誘われるように中也詩の世界へと参加者は酔い、空気は揺れ高揚してきました。

続いて、私も伊藤拾郎氏のハーモニカ演奏に合わせ中也の出世作である「朝の歌」を朗読いたしました。

拾郎氏のおっしゃるには、「孝ちゃん僕は勝手に演奏するから、適当に合わせてくれればいいよ」とニコニコして言われたのですが、前奏がいつもよりは短かったのか、（それとも私が上がっていたのか）導



後列左端が伊藤孝子氏。前列右が伊藤拾郎氏、左側に座っているのは拾郎夫人。

入のチャンスを逸して困ってしまいました。：が二人のコンビは、中也没後五十年祭を皮切りに、山口FM放送、山口文化祭や山口詩祭でも「朝の歌」「悲しき朝」「汚れつちまつた悲しみに」「雪の宵」「空しき秋（老いたる者をして）」「盲目の秋」「冬の長門峡」などレパートリーを広げ、自宅での練習は日が暮れるのを気付かないほど夢中になったりもしたものです。とにかく良いパートナーなので（失礼な言い方ですが）、当日どうにか楽しく仕上げたことでした。

中原中也記念館が完成するまでは、ほんのささやかな行事ではありましたが、詩人の仲間として山口詩話会が山口市詩祭で、郷土出身の中也の詩心を市民の人たちと顕彰するため、年一回各地域を舞台として、生田流夕波会・柴田崩山師尺八・伊藤拾郎氏のハーモニカ演奏等に合流し、その

ときは、私が中也詩を朗読する役目を果たしてきたのでした。

中原中也記念館は、山口市民だけのものではなく、中也の詩を愛する日本人や外国の人々の宝物館なのです。

多くの有名な方々を招いての記念の会や、イベントが行われるようになり、中也の身のまわりは活気がみなぎり「中也バンザイ」と叫びたく、本当にうれしく思いました。私たち詩話会は影が薄くなり小つちやくなって、ただ見守るだけのようになっていました……が、一応の行事も一段落した平成十年の中也生誕九十年祭は、「小さなお誕生会」として、四月二十九日の中也の誕生日に中原中也記念館前庭で、自由参加でのお祝いをされることになって、私たちにも出番が訪れたのでした。

今まで、中也詩を愛し関わっていたことに、不思議な時のあつたことを感じました。時の流れに身をゆだね、与えられてくることは常に前向きに取り組む、そういう自分に合理性を感じ、これも人とのふれあいを大切にしている私に、必然的に訪れた幸せだと感じているところです。

それはさておき、話を戻し、小さな誕生会には私たち（あえて言わせていただいで、伊藤拾郎氏と私の共演）が済んだ後は、参加者の飛び入り大歓迎で、福田百合子館長さんほか、福田副館長さん・真砂さん・那須さん・徳留さん・中原美枝子さん・詩話会の横水正治氏や県外からただひとり参加者、大分市、大塚晶子さん、その他の参加者も次から次へと中也詩の個性あふれる朗読があり、本当に楽しい誕生会のひとときでした。

中也も、このほほえましい暖かい誕生会

に大喜びで、帽子をほうり上げているかもしれません

時あたかも、湯田の街は温泉まつりの中で、気ぜわしく行き交う踊り子さんの赤い鼻緒のぞり姿が見えかくれし、SL山口線の枕木を敷きつめた中庭では、オカメザサ（阿亀笹）の小さな葉たちが囁くように新緑を重ねているのが印象的で、詩情を盛り上げ、午前の部が終わると、天空へと熱気がかすかに上昇して消えたのでした。

## 小さなお誕生会



詩を朗読する中原美枝子氏

平成十年四月二十九日、中原中也の九十一回目の誕生日を記念し、穏やかな春風がそよぐ晴天の下「小さなお誕生会」を開催しました。

午前中は高田公園内にある詩碑「帰郷」にご遺族の中原美枝子氏、中原中也記念館福田館長が共に献花しました。

その後、会場を記念館前庭へと移し、午前、午後の部に分けて「空の下での朗読会」を開催しました。

参加者の中には来館者の飛び入りや、自作の詩など、中也ファンの方々が思い思いの詩を朗読されたり、お気に入りの絵本をお母さんと一緒に朗読する女の子の姿も見

受けられました。

また、特別出演では中也末弟の伊藤拾郎氏によるハーモニカ演奏会が行われました。伊藤孝子氏「朝の歌」の朗読にあわせてハーモニカの音が流れ、ピンクレディーの「サウスポー」を軽快なリズムでアレンジされるなど、会場は拍手喝采で盛り上がりました。当日、前庭の枕木の横は華道小笠原流山口支部青年部による、帽子や木々を利用したモダンで前衛的な表現で彩られ、中也の

## 公共建築百選

山口市建築課

荒瀬 秀治

昨年の十一月六日(金)、東京・霞ヶ関の弁護士会館において、『公共建築百選』の顕彰式及び記念のシンポジウムが、建設大臣やこの顕彰の選定委員長である国立西洋美術館長の高階秀爾さんをはじめとする多数のご出席を仰ぎ、盛大に行われました。いろいろ調整をしていただきましたが、山口市の関係者として、私一人の出席となり、「中原中也記念館」と指定された席に公共建築協会の方に案内されたときは、いささか緊張しました。着席して間もなく、脇の入り口から建設大臣が、SP二人の方を前後に入場され、最初に挨拶をいただいたところで、式典が始まりました。

『公共建築百選』がどのようなものかという、戦後、我が国の社会経済の発展にともない、公共建築に求められる役割は多様化し、優れた公共建築が求められるようになってきました。このような公共建築の変遷を振り返り、今後の在り方を考え、そ

世界をイメージした空間が一带に広がっていました。

また、平成DADA実行委員会の皆さんの協力によるコーヒーの無料接待がなされ朗読者、観覧者の方々に大変喜んでいただくことができました。生誕90年祭ほど大がかりではありませんでしたが、中也を好きな人たちが集まり次なる生誕百年祭に向けて、親密感溢れるお祝い会となりました。(徳)

の意義や重要性について広く理解を得、公共建築の整備に対して、理解と協力を得られることを期待して、建設省設立五十周年を記念して設けられたものです。昭和二十三年以降に建築されたものに親しまれ、地域に根ざした百点の公共建築を選定するというものです。



右より、設計者宮崎浩氏、佐内正治市長、井上洋教育長、福田百合子館長。

応募総数は、三八七点にのぼり、二次審査に二〇三点が推薦され、そのうち四七点は、地区選定委員会により、特に優れた施設として推薦されました。その中に中原中也記念館も推薦を受け、顕彰の対象になりました。二次審査では、中国地方建設局・河村建築課長に現地審査や、ヒアリングを受けました。

記念館が顕彰の対象になった選定理由は

特に公表されませんでした。歴史も浅く、小さな施設が、選定されたのは、全国へ発信した競技設計で選ばれた優れた建築であること、福田館長をはじめとする関係者の皆さんの開館後の企画運営の様子から、記念館が、地域に融け込み、地域に根ざし

## 『末黒野』と吉田緒佐夢

詩人・和田健

歌集『末黒野』の最新紹介が出たのは、『あけぼの』という小さな文芸誌の第五号である。発行日は大正十一年(一九二二)五月二十八日。編集兼発行は佐久間三雄。和紙に謄写版印刷したものでそまつなものだが、内容は熱気があふれている。

この号には短歌・詩・詩劇・感想・小品・論文・創作・合評など盛り沢山に詰めこまれ、表紙共に三十一ページある。鉄筆をおくにあたり佐久間は、「昨日から書き続けて手が痛くて困ります。本号はかなり急いで書いたので巧く写ればよいがと思っています」と後記で苦勞のほどをもらしている。

その後記の前に『末黒野』の紹介があり、著者は吉田緒佐夢・宇佐川紅萩二人だけの名前が出ています。紹介文は、「うら若き郷土歌人の処女歌集にして短歌四百首を集む。緒佐夢氏の美妙なる恋愛秘曲! 紅萩氏の感傷的にして涙のしみ出るような歌!! 共にともに県下歌人詩人の愛誦惜くあたわさる所、緒佐夢・紅萩共に本誌友友にして花形役者なり、あえて諸子の座右に一本をすむ」実費二十銭。

これで見ると、どこにも中也の「中」の字もない。山川千冬(宇佐川紅萩)が『詩園』第二巻第一号(昭和十三年十二月十七

た施設であることが、評価されたのではないかとおもいます。最後に中原中也記念館の『公共建築百選』の顕彰に対して、十一月二十日(金)に記念レモニーが催されました。携わられた方々に深く感謝申し上げます。

日発行)に「末黒野時代の回想」―中原中也君のことどもーを書いて、その裏付けを発見した思いである。『末黒野』に収められた中也の歌「温泉集」二十八首は、宇佐川の収録歌に余白が出たので、その埋め草に短歌少年中也に声をかけたというのが真相であろう。このころ中也は山口中学三年生で宇佐川は一、二級上であった。一方、吉田緒佐夢(本名・理、翠泡とも号した)は防長新聞の若い記者だった。緒佐夢の号は理(おさむ)を漢字の音で当てて付けたものか。



『あけぼの』 和田健氏所蔵。

後年、私は宇佐川紅萩(本名・正明、筆名・山川千冬とも)とは懇意になり、没後遺歌集『虹と時雨』(昭和五十七年刊)を未亡人から頼まれ編んだが、ついに吉田とはいかなる人物だったか聞くことを忘れた。幸い今回『あけぼの』の発見で、宇佐川が第六号に「吉田翠泡論」を書いているので、その風貌を想像することができた。抄出し

よう。

「吉田翠泡氏は天才である。すべての意味において天才である。それは決して自己賛美でもなければ誇大妄想でもなく事実に於いて天才である。天才であるがゆえに凡人には理解できない偉大さがある。私は因習道徳乃至束縛の生活に低迷して、人間的感情、人間的心を十分に伸ばしてゆくことの出来ない人間が氏を「ホラ吹き」だとか「戯作家」とか言つて一笑に付し否内心すこぶる彼の卓越せる思想見識を憎んでいるのを見たことがある。私はかえつてその非難する人間の理解力のないのを笑つたことがある。」

決して名文ではないが、中学生の書いた仲間ぼめとは思えないひたむきなものを感じる。

吉田は萩市三見（当時は阿武郡三見村）の出身で、三つになるまで病院で乳母の手によって育てられたようで、薄幸な星の下に生を受け人生のどん底をさまよつた。しかし秀才で早くから純情な少年詩人の面影をただよわせていた、とは宇佐川の文から知つた。

また吉田は阿武郡下の二、三の小学校で代用教員もし、防長新聞短歌欄の筆頭投書家であつた。文芸欄担当の石川香村に見出され、同社の記者となつたものと思われる。その多才な活躍は県内文学青少年の畏敬的であつた。『あけぼの』誌上でも詩や随想などを発表している。

調べてゆくうち、原卓（後の児童文学作家・氏原大作）が短歌誌『水可美』第一巻第十号（昭和八年十一月一日発行）、「『小さき芽』の思ひ出」の中で、吉田緒佐夢（翠泡）に関するエピソードを書いているのを

見つけた。原卓は暁星と号し防長新聞の投稿者でもあつた。大正十年十六歳で歌誌『小さき芽』を発行し、多い時で二百部印刷した。

「紅萩はまだ山中（注・山口中学）の帽子を被つていたが、ひどく無精髭を伸ばしていた。吉田翠泡を訪ねてみようというので二人で豎小路の家に押しかけた。（中略）

飲もうというので怪しげな家に引きずり込んで、盛に虹のような気焔を吐いては僕を煙に巻いた。しまいに街を歩きながら露地にかけてこんでジャアジャア小便をやりながら、怒鳴りちらしたから、僕も面白がつてその真似をした。この翠泡が書いた詩（注・『小さき芽』に掲載）に、裁判官と墮胎娘というようなのがあつて、僕は警察へ呼ばれえらい眼玉をくつた」云々。

吉田緒佐夢（翠泡）の傍若無人で茶目つ気な性格がうかがわれる文章である。

翠泡自身は『あけぼの』第四号に掲載の「言いたい事」で、こんな風に自分を語つている。

「俺が男一生の力を打ち込んでやろうと思つてゐるのは創作と詩だ。複雑な思想はとても三十一字形や十七字形の器には盛れぬ（中略）詩では象徴派の詩にもつとも共鳴を覚える」

そう言いながらも翠泡は歌集『末黒野』を世に問うている。この時点で彼の視野の中には中原中也は無かつたかも知れない。いや事実はその反対で、中也に飲酒の味を覚えさせたのは、吉田かもと勘ぐられる。

吉田緒佐夢は防長新聞社にいつまでいたのだろう。昭和九年には萩から出ていた「長周日日新聞」の主筆をし狸眠洞と号していたらしいが、それからどうなつたか。若し篤学の士がいたら教示を仰ぎたいところで

ある。（平成十一年一月三十日、記）

追記Ⅱ文中「引用」の箇所を現代表記に改めたことを、原文作者に詫言たい。おつて、大正十五年八月八日、同名の活版短歌雑誌『あけぼの』（編集・発行者、弘中芳一）が山口から刊行されたが、これはガリ版刷

## 中原中也記念館公開講座

七月十一日から中原中也の会の協力で、山口市湯田温泉にあるサンフレッシュ山口を会場に、公開講座を開催しました。中原中也の人と作品を多くの方に理解していただくこと、分かりやすい講座を心がけながら、今年で三年目を迎えました。

市内の方を中心に申込みは七十三名。三年続けて受講された方もいらっしゃいました。今年度は、七、八月に集中して、四回の講義日程を設けました。

第一回は第一次中原中也全集から編纂委員を務めている、詩人で弁護士の中村稔氏。「私は中原中也をどう読んできたか」と題したテーマで個人的な体験としての中也と、中也詩への思い入れを語られました。

第二回は七月十八日、「中原中也」（入魚）の発見」というユニークなタイトルで、詩人で第一経済大学教授の山本哲也氏が、中原中也の詩の世界を分析されました。

第三回は八月八日、京都文教女子高等学校教諭の二木晴美氏により「中原中也と『白痴群』」と題して、中也が創刊から関わり、初期の詩の発表の場とした同人誌の重要性を解説されました。

第四回は八月二十二日、「中原中也の（うた）」と題して、青森県弘前大学教授

の『あけぼの』とは、まったく関係なく、吉田の作品も関係記事も見当たらない。なお、『末黒野』は昔のサイズで四六判、二〇頁。奥付がなく冊子のような本だが、中原中也の歌が収められたことでは貴重である。

の長野隆氏が、中也の詩は現在の私たちに（うた）にかけてくる、と話されました。

九十分の時間の内、終わりの二十分程度を質疑応答の時間に当て、疑問に感じたことや、日頃から中也について考えていること、講座の印象などについて講師と意見交換をしました。

今年度から、毎回の講座終了後に、希望者を募つて近くの喫茶店で講師を囲んでのティータイムの席を設けてみました。十人前後の参加者があり、講座の時間とは別の中也論も聞くことができ、とても好評でした。今年も特別講座として、九月二十日に行われた中原中也の会大会の、文芸評論家栗津則雄氏の「中原中也雑感」と題した講演会に参加していただきました。

全国各地活躍されている研究者や実作者の方から、様々な中原中也論を学ぶことができ、受講者の方ひとりひとりの中に、新たな中也の世界が展開していったのではないのでしょうか。

（真）



講義中の中村稔氏

## 中也の軌跡Ⅳ 『山羊の歌』が世に出るまで

今年度の企画展は、中也が第一詩集『山羊の歌』を出版するまでの経緯に焦点をあて、10月20日から11月23日までの約一ヶ月間開催しました。

監修は北川透氏（詩人・梅光女学院大学教授）と佐々木幹郎氏（詩人・『新編・中原中也全集』編集）にお願いしました。

### 展示Ⅰ 詩集出版の計画

中也が京都で出会った詩人・富永太郎は、大正14年に夭折、昭和2年に私家版の『富永太郎詩集』が刊行されます。それに刺激されたのか、その頃の中也の日記には詩集名らしき名前が幾つか記されています。

大岡昇平は、昭和3年頃から中也が使用したノートに（小年時）と書かれていること、『山羊の歌』の第2章の題が（少年時）とされたことなどから、「少年時」が詩集名として考えられていたのではないかと推測しています。

しかし、この頃計画された詩集出版は実現されませんでした。

### 展示Ⅱ 第一詩集へ向けて

中也は『山羊の歌』出版を、昭和7年4月〜5月頃に計画し、6月には編集も終えていたと、友人安原喜弘は伝えていますが、

当初は予約出版として計画され、中也は友人達へ二度、予約募集のはがきを出

しています。しかし、思うように集まらず、自費出版へと変更、母フクに三百円を出してもらいます。

9月には美鳳社で印刷が開始され、校正は7校ぐらいまでとつたと言われています。紙質、色、レイアウトなど中也は細かく指示しています。

しかし、本文の印刷のみで資金が続かず、装幀と製本ができぬまま、以後約2年間、紙型と本文は安原喜弘にあずけられます。

### 展示Ⅲ 中也奔走

昭和8年4月、中也は出版社との交渉を始め、製本・販売を引き受けてくれるところを探します。

芝書房、江川書房、降章閣、建設社とあたりますがうまくゆかず、昭和9年11月下旬、ようやく文圃堂に決定します。

中也は文圃堂主人に、高村光太郎に装丁の依頼を頼みます。

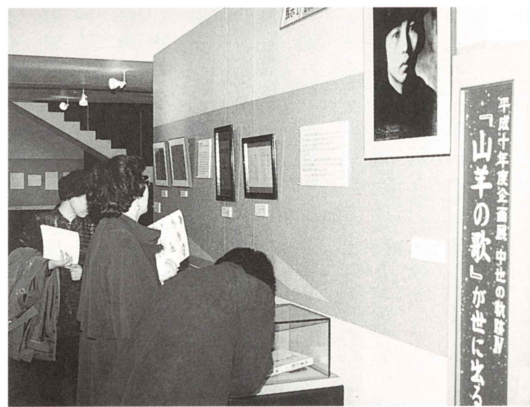
### 展示Ⅳ 詩集『山羊の歌』

昭和9年12月7日、第一詩集『山羊の歌』が出版されます。限定二〇〇部の自費出版で、頒価は三円五〇銭。四六倍判という大判で、和装箱入り、高村光太郎の題字は金箔で、本文は英国製コットン紙を使用した豪華な詩集でした。

中也は友人や詩人たちに毛筆で署名をして詩集を送ります。

『山羊の歌』の広告は、推薦者高村光太郎・辰野隆・小林秀雄・河上徹太郎・三好達治の名とともに雑誌に掲載されました。また、室生犀星、草野心平、古谷綱武らも好意的な書評をしています。

第一詩集『山羊の歌』によって、中也も優れた近代詩人の仲間入りを果たしたのでした。



## 小企画展示

記念館の一階展示室の小さなスペースで、毎回二ヶ月程度の期間でテーマを変えながら、小企画展示を行っています。

四月の贈呈式にあわせて開催した「中原中也賞」展は、第三回の受賞詩集『ブルックリン』の紹介と共に、著者宋敏鎬

氏の参加した同人誌や、文芸誌に投稿して掲載された詩、そして創作日記などを展示して、宋氏の活動の足跡をたどりました。

六月から、間に企画展（十、十一月）を挟んで一月まで、三回のシリーズで開催した「中也詩掲載雑誌Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」では、記念館の収蔵資料から、中原中也の詩が掲載された雑誌を、時代別と翻訳詩に分けて展示し、その雑誌の特徴や、参加していた同人たちを紹介しました。

一回目の「昭和十年頃までに創刊された雑誌」では、『スルヤ』『白痴群』『四季』『コギト』などを、二回目は『山羊の歌』刊行から晩年、そして没後の雑誌として、『歷程』『文学界』『文芸懇話会』『詩精神』『文芸汎論』などを、そして三回目は「翻訳詩」を発表した雑誌として、『半仙戯』『書物』『ヴァリエテ』『椎の木』『苑』などを展示しました。

同人雑誌からは、その時代の背景や雰囲気などを感じることができ、同じ雑誌に作品を発表している文学者たちの顔ぶれから、雑誌の方針や主義主張を見出すことができます。また、鮮やかな色彩で、現在でも色褪せないおしゃれなデザインの表紙を使っている雑誌もあり、視覚的にも十分楽しむことができました。

一月から三月末までは、「中原中也が読んだ本」と題して、中也の読書記録に残っている書籍の紹介をしました。

常設展示室の一角で、展示資料も限られますが、これからも、年間を通じてさまざまなテーマで、中原中也の魅力を紹介していきたいと思えます。（真）

# 開館5周年を 迎えて

中原中也記念館は、平成六年二月十八日に開館し、平成十一年に開館五周年を迎えました。これを記念し、新しいミュージアムグッズとして記念館オリジナルの一筆箋を作成、この日から販売を開始。また、五周年特別企画として「中原中也と前川佐美雄」展（二月十八日～二十八日）を開催しました。

開館記念日の二月十八日は、九時の開館と同時に、企画展のオープニング。福田百合子館長による開式のことば、佐内正治市長のあいさつ、来賓の佐々木幹郎氏のあいさつ、前川佐美雄のご子息で歌人の前川佐重郎氏のあいさつの後、前川氏、佐々木氏、市長、井上洋教育長、中原家ご遺族・中原美枝子氏の五人で、テープカットがなされました。その後、学芸員の解説とともに展示を見ていただき、昨年発見された中也直筆の書簡八通に加え、佐美雄の第一歌集『植物祭』や、中也の詩が掲載された雑誌「日本歌人」など、じっくりとご覧いただきました。

佐重郎氏、佐々木氏による書簡発見の経緯や中也と佐美雄との関係、福田館長の昭和27年当時の写真についての解説など、興味深い話が飛び出し、参列いただいた方々は、楽しそうに耳を傾けていました。

この日は入館料無料で、375人の方にご来館いただき、平常よりもにぎわいをみせました。



前列左より、前川佐重郎氏、佐内市長、佐々木幹郎氏、福田館長、中原美枝子氏

## 常設展示パネル替え

年譜形式で中也の生涯を紹介している展示パネルが、以前から褪色がひどくなっていましたので、10月19日の閉館日にパネルの取り替えを行いました。

それにとともに、展示資料も数点で増やすことにしました。

中也記念館も、開館して5年目を迎える色褪せたパネルには、過ぎていった時間が感じられました。

また、光というものがこんなにも資料を痛めるのか驚きました。

資料の公開と保存という矛盾の中で、どうやって資料を守っていくかは、文学館、博物館、資料館の共通の課題です。

記念館でも、常設には、多くレプリカ（複製）を展示していますし、古書についても復本のあるものを展示しています。

## 寄贈資料

- 中原中也筆 大谷從二宛葉書
- 大谷從二宛 中原中也死亡通知
- 中原福筆 大谷從二宛札状
- 『大谷從二詩集』 大谷巖氏
- 中原中也 小学生時代の机 中原美枝子氏
- 中原中也 東京時代の机 伊藤拾郎氏
- 関口隆克写真 清水基吉氏
- 前川佐美雄写真（複写） 和田健氏
- 『清川病院史』 清川病院
- 『村井康男遺文集 天上大風』 村井福子氏
- 三田洋著『抒情の世紀』 三田洋氏
- 藤原明夫著『中原中也、太宰治そしてノーベル賞を超えた三人の日本人』 藤原明夫氏
- 野々上慶一著『文圃堂こぼれ話 中原中也のことども』 野々上慶一氏
- 『杉本春夫全集 別巻』 杉本三千代氏
- 『中原中也詩集』 角川春樹事務所
- ORNBAUD 『LETRES DE LA LITTÉRAIRE』 大出敦氏
- 山下利昭著『立原道造とソネット』 山下利昭氏
- 『詩集 妖精の詩（英訳版）』 ザイロ
- 『海外詩文庫 ランボー詩集』 鈴木和成氏
- 溝上日出夫作曲『中原中也の詩による四つの女声合唱曲』 溝上日出夫氏
- 『自作朗読による 日本現代詩大系』（カセットテープ） 栗津則雄氏
- 『日本歌人』 前川佐重郎氏
- 『日矢』 日矢俳句会
- 『歷程』 歷程社
- 『山羊の歌・在りし日の歌』 前川博司氏
- NHK『音楽のおくりもの 中原中也』（カセット） 加藤直人氏
- 中村翁著『精神病質者二実験的二施シタル諸種作業ノ治療的効果』（コピー） 飛鳥企画
- 佐々木幹郎著『詩人の老い方』 佐々木幹郎氏
- 『目で見る山口・防府の一〇〇年』 郷土出版社
- 『和田徹三論集』 和田徹三氏

このほかにも、研究論文や著書などを多くの方からお寄せいただきました。ありがとうございました。

# 新収蔵資料紹介

平成十年十月三日、大谷巖氏より大谷從二宛書簡を三通、ご寄贈いただきました。大谷巖編『大谷從二詩集』(鳥影社)にも、中書簡について紹介されていますが、(一)でも改めて紹介させていただきます。

## 一、中原中也書簡 大谷從二宛

昭和十二年九月二十日

(はがき 14×9 ペン書)

表 島根県大社町

大谷從二様

鎌倉町扇ヶ谷

一八一 中原中也

九月廿日

裏

拝復／お訊ねの意味がよく分りませんが、／今度出しました「ランポボ詩集」は、／メルキュル版ランポボ全集の詩の部／分の全訳です。四六版三百頁。一、八〇銭／牛込区柳町二四野田書房(振替東京／五二四七九)——詩の部分といふ意味は／散文詩を除くあと全部といふつもりです。／先は右御返事迄。

消印 鎌倉 12・9・20 后9-4

## 二、中原中也死亡通知 大谷從二宛

昭和十二年十月二十二日

(はがき 14×9 宛名ペン書 印刷)

表 島根県大社町  
大谷從二様

父中也儀豫て病氣の處廿二日午前零時十分死に仕候間此段御通知申上候／追而十月廿四日午後三時半より四時半迄鎌倉町／壽福寺に於て告別式相營可申候／昭和十二年十月廿二日／鎌倉町壽福寺境内／中原愛雅／親戚一同／友人一同

消印 鎌倉 12・10・22 后4-8

## 三、中原福書簡 大谷從二宛

昭和十二年十月二十九日

(封書 21.5×8.3 墨書)

便箋 23×16 ペン書

封筒

表 島根県大社町

大谷從二様

裏 相州鎌倉町扇ヶ谷一六一

中原福

十月二十九日

便箋

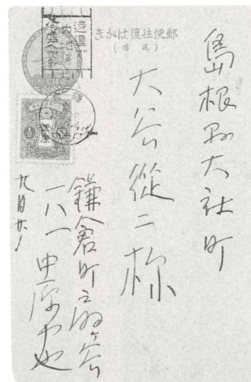
故中也儀死去の節は早速ご丁寧にお悔状頂き／まして誠に有難ふ御さいました御かげ様で皆様から／非常に可愛がつて頂いて居りました然るに本月の初／頃より床につきまして以来日毎に悪くなる計りにて／遂に二十二日の夜亡くなりました無事であなただ様にお目／にかゝる事ができましたらさぞかしよろこびました／事と存じます 申おくれでしたが御兄上様には／御戦死遊ばしましたと御国の御ためとは申ながら／御遺族様方にはさ

ぞかし御愁傷の御事と存じ上ます／早速参堂御悔やら御禮申上度と存じますが明日から／引上げてまして国に帰りますので略儀ながら書中にて／御礼申上ます／敬具／十月二十九日／大谷從二様／故中原中也／母 福／国は山口縣山口市湯田で／御さいいます

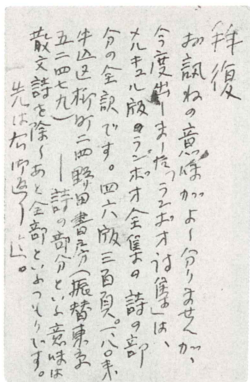
消印 鎌倉 12・10・29 后0-4

## 大谷從二(おおたによりじ)

大正4年1月4日、島根県簸川郡大社町に生まれる。雑誌「詩精神」「コギト」「詩人」などに作品を発表。昭和59年詩集『朽ちゆく花々』で第17回小熊秀雄賞を受賞。平成2年、75歳で死去。



昭和12年9月20日付中原中也筆大谷從二宛はがき



# 中原中也の会 入会の手引き

中原中也の会は、一九九六年九月二十二日に総会・創立記念大会をもって正式に発足いたしました。

この会は、中原中也の詩を愛する者、研究する者、関心をもつ者がひろく交流し、中原中也とその作品についての理解をふかめるための場をつくることをめざしています。

## 【事業として左記のを行います】

- ・講演、研究発表、シンポジウム、研究会、講座、文学散歩などの開催
- ・機関誌『中原中也研究』、会報などの編集、発行
- ・中原中也記念館における関係資料、情報への協力

## 【年会費】

- ・個人会員 五千元
- ・学生(大学院生も含む) は半額
- ・法人会員 一口 一万円

## ■郵便振替口座 01520-8-1811

※入会を希望される方は中原中也記念館内中原中也の会事務局へお気軽にお問い合わせてください。



■平成10年

3月14日

(5月31日)  
JRMステリー・ツアーへ協力、全日開館

23日  
英文銘板取り替え

31日  
『中原中也研究』第3号発行

『中原中也記念館館報』第3号発行

4月9日 (5月10日)

小企画展示「第3回中原中也賞」

11日 第1回中原中也記念館運営協議会(於 かも福)

11日 第3回中原中也賞贈呈式及び記念講演(山口市教育委員会主催)

受賞者 宋敏鎬 詩集『ブルックリン』

記念講演「詩人はつらい」

講師 金子兜太(俳人)

第2回中原中也賞英訳詩集贈呈(長谷部奈美)

江『もしくは、リンドバークの畑』

場所 かも福

11日 (8月12日)

小企画展示「中也詩掲載雑誌Ⅰ」

25日 中原美枝子氏より中也小学生時使用の机を寄贈

30日 (31日) 中也の机を報道関係に公開

7月11日 第8回公開講座「私は中原中也をどう読んできたか」

講師 中村稔(詩人・弁護士)

場所 サンフレッシュ山口

18日 第9回公開講座「中原中也、(人魚)の発見」

講師 山本哲也(詩人・第一経済大学教授)

8月1日 開館時間1時間延長試行開始(9月30日)

2日 伊藤拾郎氏より、中也が東京で使用した机を寄贈

8日 第10回公開講座「中原中也と『白痴群』」

講師 二木晴美(京都文教女子高等学校教諭)

13日 (10月18日)

小企画展示「中也詩掲載雑誌Ⅱ」

22日 第11回公開講座「中原中也の(うた)」

講師 長野隆(弘前大学教授)

9月19日 中原中也の会 理事会

20日 中原中也の会 第三回大会

シンポジウム「中原中也と童謡の時代」

パネリスト 谷川俊太郎、佐々木幹郎、中島

国彦、司会 樋口寛

講演「中原中也雑感」

講師 粟津則雄

場所 ホテルニュータナカ

10月3日

大谷巖氏より中也直筆を含む大谷從二宛書簡三

9日 (11月23日)

「中原中也―鎌倉の軌跡―」開催(主催 鎌倉

# 中原中也記念館の記録



文学館

20日 (11月23日)

企画展「中也の軌跡Ⅳ―『山羊の歌』が世にでるまで―」

中也命日・お墓参り

22日 NHK衛星放送「詩のボクシング」番組撮影に協力

25日 中原中也の会・鎌倉文学散歩

31日 講演「『一つのメルヘン』と『蛙声』」

講師 中村稔

案内 佐々木幹郎

展示説明 中村稔・佐々木幹郎

11月6日 中原中也記念館が建設省創立50周年記念

「公共建築百選」に選定される

6日 第2回 中原中也記念館運営協議会(於 ホテルニュータナカ)

「公共建築百選」顕彰状及び賞牌披露式

20日 全国文学館協議会・総務情報部会にて事例報告

25日 (1月27日)

小企画展「中也詩掲載雑誌Ⅲ」

12月1日 大谷從二資料を報道関係に公開

18日 第4回中原中也賞応募締切

28日 (1月4日) 年末年始閉館

■平成11年

1月24日

中原中也の会理事会(於 東京・虎ノ門パストラル)

28日 (3月31日)

小企画展「中原中也の読んだ本」

(2月18日)

新収蔵資料展「大谷從二宛 書簡」

18日 開館5周年 入館無料

18日 特別企画展 オープニングセレモニー

(2月28日)

特別企画「中原中也と前川佐美雄」展

20日 第4回中原中也賞選考会(於 山口・西村屋旅館)

和合亮一氏(福島県)の詩集『AFTER』

(思潮社)受賞。

5月30日

中原中也の会 第2回研究集会

研究発表 大出敦 中原豊

小講演「中也と抒情」

講師 道浦母都子

講演「中原中也と大岡昇平」

講師 吉田熙生

場所 日本近代文学館

6月2日

高森文夫氏死去。

## 第四回 中原中也賞

### 詩集『AFTER』

和合 亮一さん(30歳)



新鮮な感覚を備えた、優れた現代詩の詩集に贈られる中原中也賞は、第四回目を迎えました。二月二十一日、中也の結婚披露宴が行われた西村屋旅館「葵の間」において、選考会が開かれました。

二百三十点の候補詩集から最終選考に七冊が選ばれました。そこから和合亮一『AFTER』、松元泰介『空の塚』、萩原健次郎『絵桜』の三冊に選ばれ、二週間を超える討議を経て、慎重に審議された結果、『AFTER』が選ばれました。

選考委員を代表して、詩人の中村稔氏が「現代の狂躁状況の中で、試行錯誤しながら、もがき、格闘し、反抒情的な新しいポエジーを、造型しようとしている姿勢が認められ、この姿勢を選考委員は

評価した。この詩集は完成度が高いとはいえないけれども、現代に生きる青年の生理的な衝動をまざまざと感じさせるものがあり、この詩人の豊かな将来性を期待できる」と選考理由を説明されました。

佐内正治山口市長も「今回の受賞を契機にさらに意欲的な創作活動をされますことを心から期待申し上げます」と祝福されました。

和合さんは受賞の知らせを聞いて「昔から中原中也には惹かれていて、この賞をいただくという形で中也に近づくことができたいへんうれしい。受賞は、運転免許証をもらった気持ちです。これからはいただいた免許を大切に、言葉の運転をしていきたいと思えます。」と話されました。



贈呈式は、四月二十四日(土)十六時三十分から山口市のニューメディアプラザ山口で行われます。

## 第五回 中原中也賞

### 募集!

この賞は、日本の近代詩史に偉大な貢献をなした山口市出身の詩人、中原中也の業績を永く顕彰することを目的とします。そのため、新鮮な感覚を備えた優れた現代詩の詩集に対しこの賞を贈り、詩を通じて豊かな芸術文化意識の高揚をはかります。

【対象】平成10年12月1日から平成11年11月30日までに刊行された現代詩の詩集。(奥付の刊行年月日による)

【応募方法】著者本人が、同じ詩集三部を「中原中也記念館」へ送付してください。

中原中也記念館

〒七五三-〇〇五六

山口県山口市湯田温泉一丁目一-二二

なお、「中原中也賞応募」と明記の上、本名、年齢、住所、郵便番号、電話番号を記入したものを添付してください。

送付されました詩集は原則として返却されません。

応募に関するお問い合わせは、事務局までお願いします。

【応募締切】平成十一年十二月十七日(当日消印有効)

【正賞】受賞詩集を英訳本として出版。

【副賞】百万円

【選考委員】荒川洋治、北川透、佐々木幹郎、佐藤泰正、中村稔、吉田熙生(五十音順)

【発表】平成十二年二月の選考会終了後、報道機関を通じて発表します。また、文芸誌『ユリイカ』(青土社)四月号に掲載します。

【主催】山口市

【後援】青土社、角川書店

【事務局】山口市教育委員会 文化課内

「中原中也賞事務局」

〒七五三-〇〇七三

山口県山口市春日町五番一号

電話〇八三九-二〇一四一一

### 編集後記

記念館は開館5周年を迎えました。中也という詩人の文学館として、多くの方々の思いを集約しようとし、歩んできたのではないかと思います。

人の思いという、目には見えないもの、姿をはっきりと持たないために、誤解され、軽んじてしまわれがちなもの。

今という時代こそ、ひとりひとりの思いを大切にできなければならないのではと考えます。

△詩は/魂と心の暗示です。/決して魂や心自体ではない。▽△現実を見たから、暗示が自在なのです。▽(中也、昭和二年十月三十一日の日記より)

魂と心を現実において言葉を紡いだ詩人、中也にならって、記念館も此処に在り続けたいと願っています。(那)

### 発行

中原中也記念館 館報 第四号 平成十一年三月三十一日  
TEL(〇八三九)三三二一六四三〇  
FAX(〇八三九)三三二一六四三一  
〒753-0056 山口県山口市湯田温泉一丁目十一-二十一